

「涅槃会」

寺子屋プロジェクト和尚さんのお話 第13回：「涅槃会」

2月15日は、お釈迦様がお亡くなりになった「涅槃会」です。  
本日の坐禅会の前にお時間をいただいて涅槃会を行いました。

涅槃会に因んでお話させていただきます。

お釈迦様は涅槃に臨んで、弟子のアーナンダに残した言葉とされる「自灯明法灯明」（自らを灯とし、法を灯とせよ）という教えがあります。

涅槃会に因んで、西行法師の有名な歌に、「願わくは 花のもとにて 春死なむ その如月の 望月の頃」という有名な歌があります。

「如月」とは「2月」の事です。「望月の頃」とは、月の周期を基にした旧暦で15日となります。つまり、お釈迦様の涅槃会の頃という意味になります。

西行法師は、お釈迦様を深く敬っていました。

人は必ず死ぬ。どうせ死ぬのならば、お釈迦様と同じ日に死にたいという憧憬の歌なのです。

旧暦の2月15日は、今の新暦でいえば、今年ならば3月の17日にあたります。咲きはじめの桜の木の下、月の光で明るく照らすその木の下でお釈迦様と同じ日に永遠の眠りにつきたい」という憧憬の歌を詠ませたのでしょうか。

実際、西行法師は2月16日に亡くなり、当時の知識階級の人々に感銘を与えました。

もともと西行法師は、武士階級出身です。

平清盛と同じころに北面武士を勤めた事もありました。

出家をし、旅に生き、歌に生きた西行法師でした。

公家の世から武士の世へと移り変わる世相に無常を感じたのではないのでしょうか。

出家の機縁として失恋説や友人の死などの説がありますが、現代と同じように

価値観などの激変の中で無常を感じたのではないかと思います。

何を信じていいのかわからなくなったから、心の鎧を脱ぎ捨て、真裸になって出家をしたのだと思います。

その真裸の心から湧き出る心、何にも依存しない、素直な感動をそのまま歌に詠むことが、西行法師の「自灯明 法灯明」なのかもしれません。

「自灯明 法灯明」の言葉が発せられたのは、お釈迦様の臨終の時と伝えられています。

お釈迦様がいよいよ亡くならんとするその時にあたって、弟子のアーナンダが、悲しみのあまり「どうぞこの世に留まって、私達を置いていかないでください。」と訴えます。

お釈迦様は、「アーナンダよ。人は誰も死を免れることはできないのだ。私が亡くなった後は、自分を灯（ともしび）にして、自分をよるべ(拠り所)として、他に依存せず生きなさい。

真理を灯にして、真理をよるべとして、他に依存せず生きていきなさい。」とご遺言を残しています。

それが「自灯明 法灯明」のお言葉として伝えられているのです。

「灯明」は、古代インド語の訳ですが、一説に「洲」と訳す人もいます。川の中州です。

インドはガンジス川が有名です。

その水害で流される人も多かったと思います。

人の一生を大河にたとえて、流されそうになったときも、脚下に洲を踏みしめ拠るべとしなさいと教えてくださっているのです。

ただ、この「自分」は、「ととのえられた自分」であり、初期の経典である「法句経」にそのことが出ています。

#### 法句経 160

「おのれこそ おのれのよるべ おのれを措きて 誰によるべぞ  
よくととのえられし おのれこそ まことえがたき よるべをぞ獲ん」

自と法、ととのえられた自分と真理は、並列的に置かれるものでは無いと信じます。

法は、何か外側にある真理ではなく、ととのえられた自分のなかに見出す法が

よるべとなる真理なのです。

人それぞれが、それぞれの因縁による体験を生きています。

その体験にこそ、自分自身のよるべとなる真理を見出すことができるのではないのでしょうか。

お釈迦様のお弟子に、シュリハンドクという方がいます。この方は、お兄さんのマカハンドクに誘われてお弟子になりました。

お兄さんに何度お経を教えられても覚えることができません。

とうとうお兄さんから叱責され、家に帰るよう言われます。

翌日、途方に暮れたシュリハンドクが門の前で泣き悲しんでいると、通りかかったお釈迦様が「どうしたのか。」と問いかけられます。

そこで事情を話したところ、お釈迦様は、精舎に留まって毎朝掃除をするように、また、そのときに「塵を払わん、垢を除かん」と唱えるようにお命じになります。

それ以降シュリハンドクは来る日も来る日も、「チリをはらわん、アカをのぞかん」と繰り返し唱えながら掃除に励んだそうです。

「チリをはらわん」を覚えると「アカをのぞかん」を忘れる、といった具合に。何度忘れても、周りの人に支えられながら、掃除に励みました。

ある日、自分のなかにすーっと落ちるものがあって、悟りを得ることができたのです。

それは単にお経を覚え、学問することによってではなく、塵や垢、埃を除いて清めることに身も心もひたすら集中するなかで、自分自身の掃除という体験に真理を見出したのです。

仏教とくに禅宗は、体験によって、自分をととのえることに重きをおきます。どうぞ、坐禅会では、坐禅という体験を通して自分のなかにこそ、真理を、生きるよるべを見出してください。

(注) 因と縁、因縁については、HP 和尚戯言もご参照ください。

なお、法句経：友松圓松(講談社学術文庫)に、次の詩句があります。

おのれこそ おのれの救主(あるじ)

おのれこそ おのれの帰依(よるべ)  
されば まこと 商侶(あきうど)の  
良き馬をととのうるがごとく  
おのれを 制(ととの)えよ

第 25 品 380

蛇足) 赤塚不二夫の「天才バカボン」でお馴染みの、レレレのオジサンは、シュリハンドクがモデルだそうです。また禅画にでてくる寒山拾得の拾得さんが箒を持っているのは、このお話とつながりがあるのでしょうか。さらに地口の「掃除と勉強には終わりが無い」は？ 等と想像が広がります。

(文責 中村彰利)